

若手の熱意 甘く実れ

つややかな濃紫色の房が、大人の背丈ほどの棚から垂れ下がる。羽曳野市駒ヶ谷。約1畝のブドウ畑で、農業橘谷訓旨さん(33)が大粒のピオーネを1房ずつ収穫する。

同市は、隣接の柏原市、太子町とともに市内のブドウ産地として知られる。橘谷さんは昨年未、30歳代の若手農家9人で出荷組合駒ヶ谷ぶどう工房を結成。今年5〜7月にはシーズンを迎えたテラウエ

Naniwaなう夏の

アを南河内地域のスーパーチェーンに直販し、9人それぞれの顔写真を添えて並べた。府内のブドウ生産量は昭和初期に都道府県別で日本一になったが、担い手の高齢化や農地の宅地化で減少。「若い世代の柔軟な発想で、再び大阪のブドウを全国的なブランドにしたい」と橘谷さん。ピオーネは9月末頃まで河南町の「道の駅かなん」などで販売している。

(川)

